

通巻 65 号 December, 2025

## 日本通信教育学会報

Japan Association of Distance Education

## 目 次

・ 第 73 回研究協議会を終えて . . . . .	1	・ シンポジウム参加報告 . . . . .	5
・ 『研究論集』投稿募集 . . . . .	3	・ 会員の声 . . . . .	6
・ 理事会報告 . . . . .	3	・ 通信教育の動向 . . . . .	7
・ 会員 . . . . .	4	・ 通信教育のこの一冊 <sup>㉔</sup> . . . . .	8

## 第 73 回研究協議会を終えて

2025 年 11 月 8 日（土）、桜美林大学新宿キャンパスにて、日本通信教育学会第 73 回研究協議会が開催されました。参加者数は 28 名（会員 19 名、非会員 9 名）でした。研究協議会終了後には情報交換会が行われ、13 名が参加し、通信教育について意見交換するなど、盛会となりました。

午前の部では、まず、鈴木克夫会長（桜美林大学）よりシンポジウムのテーマである添削指導に関する話題提供を交えながら開催の挨拶が行われました。挨拶の後、自由研究発表 2 件、特別研究発表 1 件が行われました。総会・昼食・休憩の後に行われた午後の部では、自由研究発表 1 件とシンポジウムが行われました。司会は梅川紗綾（福井大学）が務めました。以下に当日の発表内容の概略を報告いたします。

## 【自由研究発表】

長谷川晴通会員（元国鉄職員）からは、「国鉄通信教育の科目について」の題目で、昭和 25 年 3 月より 36 年間続いた国鉄通信教育について、携わった職員たちがどのようにして通信教育を進めていったのかについて、通信教育指導要領や制定された規程、科目、講師に関する調査の結果が報告されました。

江田友祐会員（桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科修了生）からは、「大学通信教育の質保証」の題目で、印刷・放送授業の添削等による指導の要件、メディア授業（オンデマンド型）の教員または指導補助者による十分な指導の要件、また、単位制度における本人性の確保、学習時間の確保についての課題についての研究発表がありました。

寺尾謙会員（神奈川工科大学）からは、「通信制大学における併修制度の意義と課題に関する一考察—併修制度の再興と大学通信教育の在り方—」の題目で、通信制大学が実施する専門学校との併修制度について、併修制度を活用する専門学校と、制度を運用する通信制大学等による意義と、その運用事情を踏まえた課題について研究発表がありました。

## 【特別研究発表】

加藤圭太会員（早稲田大学大学院／愛知県立旭陵高等学校）からは、「通信制高校の面接指導の設計に関する一考察」の題目で、通信制高校の数学教育に関する自身の 2 つの研究について紹介があり、これらから得られた知見から通信制高校の面接指導のデザイン原則が示されました。発表の後、指定討論者である重田勝介会員（北海道大学）との討論及び会場からの質疑応答が行われました。

## 【シンポジウム】

シンポジウムはシンポジスト 3 名による話題提供とワールドカフェ方式による参加者同士のディスカッションの二部制で実施され、テーマは「通信教育における添削指導の不易と流行—過去から学び、これからを考える—」でした。コーディネーターは加藤圭太会員（早稲田大学大学院／愛知県立旭陵高等学校）が務め、シンポジスト

として、香取潤子氏（ベネッセコーポレーション ハイタッチサービス部部长）、古壕典洋会員（星槎大学大学院教育学研究科 准教授）、加藤圭太会員が登壇しました。

コーディネーターでもある加藤圭太会員からは、添削指導の不易と流行に着目し、通信制高校、大学通信教育、民間通信教育など多様なフィールドの過去の実践を振り返り、参加者の対話により、多角的に検討することが本シンポジウムの目的として説明されました。また、「公立通信制高校における添削指導の現状と実践の紹介」と題し、公立通信制高校の実践紹介として、紙、紙+デジタル、デジタルでの実践が紹介されました。

古壕典洋会員からは、「その人を見るには？—大学通信教育の添削指導—」と題し、添削指導のとらえ方として先行研究から様々な考え方が紹介されました。また、星槎大学のレポート添削における学生支援のための教職員ハンドブックの事例が紹介され、レポート添削における具体的なポイントが示されました。

香取潤子氏からは、「進研ゼミ赤ペン先生の添削指導について」と題し、進研ゼミの赤ペン先生の添削指導サービス、赤ペン先生への添削指導に関するサポートの仕組み、新たに始まった AI 添削についての紹介がされました。

発表後は質疑応答が行われ、添削指導における手書きとテキストデータの違い、添削を見越した設問づくりの工夫、無回答・白紙への受け止め等について参加者から多くの意見や質問が寄せられました。また、続いてワールドカフェ方式の参加者同士のディスカッションが行われ、活発に意見交換がなされました。

研究協議会当日は、予定されていた全プログラムを滞りなく終えることができました。また、会場をご提供いただいた桜美林大学および関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

梅川 紗綾（福井大学）



写真：シンポジウムのテーマである添削指導に関する話題提供を交えながら開催の挨拶をする鈴木克夫会長



写真：シンポジウムにおけるワールドカフェ方式での参加者間でのディスカッション内容を共有する様子

## 令和 7 (2025) 年度『研究論集』投稿募集

### 令和 7(2025)年度『研究論集』「論文・研究ノート・実践報告」投稿の募集

下記の通り、令和 7(2025)年度『研究論集』への論文の投稿を募集します。投稿を希望する会員は、ふるってご応募下さい。

#### (1) 題目届の提出

- ・ **提出方法**：投稿を希望する会員は、下記期日までに題目等(①氏名、②所属、③題目、④論文カテゴリ)を事務局宛に電子メール(jade.office.1950@gmail.com)にてお知らせください。
- ・ **提出締切**：2026 年 1 月 9 日(金)

#### (2) 原稿の提出

- ・ **提出方法**：題目届の提出後に送付される投稿票に必要事項を記載のうえ、投稿原稿とあわせて事務局宛に電子メール(jade.office.1950@gmail.com)にて原稿は MS-Word で作成の上、提出して下さい。
- ・ **提出締切**：2026 年 2 月 27 日(金)

#### (3) 刊行日(予定)

- ・ 2026 年 6 月 30 日(火)

#### (4) 留意点

- ・ 投稿に際しては、学会 WEB ページ掲載の「投稿原稿の執筆上の注意点」にある「投稿規定」、「二重投稿の定義とその例外について」もご確認ください。

### 令和 7(2025)年度『研究論集』「書評・図書紹介」執筆の募集

下記の通り、令和 7(2025)年度『研究論集』の「書評・図書紹介」の投稿を募集します。

#### (1) 「書評・図書紹介」で取り上げる図書

- ・ 通信教育、遠隔教育などに関する内容を含み、原則として刊行から 3 年以内(2022 年 1 月以降)

#### (2) 分量

- ・ 「書評」が 4,000~6,000 字程度、「図書紹介」が 2,000~4,000 字程度

#### (3) 投稿希望届の提出

- ・ **提出方法**：投稿を希望する会員は、期日までに、1 氏名、2 所属、3 取り上げる図書の「著者名、書名、出版社名」を事務局宛に電子メール(jade.office.1950@gmail.com)にてお知らせください。
- ・ **提出締切**：2026 年 1 月 9 日(金)

#### (4) 原稿の提出

- ・ **提出方法**：原稿は MS-Word で作成し、事務局宛に電子メール(jade.office.1950@gmail.com)にてお送り下さい。
- ・ **提出締切**：2026 年 2 月 27 日(金)

#### (5) 刊行日(予定)

- ・ 2026 年 6 月 30 日(火)

#### (6) その他

- ・ 「論文」と「書評・図書紹介」との同時投稿を認めます。
- ・ 必要に応じて査読委員会で採否を審査し、修正を求める場合があります。

## 理事会報告

### 1. 2025 年度第 1 回理事会報告

2025 年度日本通信教育学会第 1 回理事会が、2025 年 7 月 1 日(火) 15 時から 16 時 30 分に Zoom を用いて開催され、以下の事項が、審議、報告された。

【審議事項】

- (1) 2024 年度事業報告（案）および決算報告（案）について  
2024 年度事業報告（案）および決算報告（案）について説明があり、原案の通り承認された。
- (2) 2025 年度事業計画および 2025 年度予算（案）について  
2025 年度事業計画および 2025 年度予算（案）について説明があり、原案の通り承認された。その際、「課題研究」の位置づけおよび運用について質疑があり、「課題研究」が学会事業の一環であることから、①実施にあたってはその旨を明示すること、②代表者は実施の前後に事務局への連絡を要することが確認された。
- (3) 第 73 回研究協議会の開催について  
第 73 回研究協議会の開催について説明があり、原案の通り承認された。
- (4) 今後の『研究論集』のあり方について  
今後の『研究論集』のあり方について説明があり、原案の通り承認された。
- (5) 後援・協賛・協力及び共催等名義使用の取扱規程（案）  
後援・協賛・協力及び共催等名義使用の取扱規程（案）について説明があり、原案の通り承認された。

【報告事項】

なし。

## 2. 2025 年度第 2 回理事会報告

2025 年度日本通信教育学会第 2 回理事会が、2025 年 9 月 30 日（火）15 時から 16 時 30 分に Zoom を用いて開催され、以下の事項が、審議、報告された。

【審議事項】

- (1) 第 73 回研究協議会の開催について  
第 73 回研究協議会の開催について説明があり、原案の通り承認された。なお、団体会員の参加費について、無料で参加できる人数の上限を設けるか否か、今後検討することとなった。
- (2) 2025 年度通常総会について  
2025 年度通常総会について説明があり、原案の通り承認された。
- (3) その他  
多様な参加者を募るため、研究協議会の開催概要を早期に周知する方針が審議され、承認された。

【報告事項】

- (1) 2024 年度決算監事監査報告について  
澁川監事より 2024 年度決算監事監査報告があった。
- (2) 新規事業について  
古壕事務局長と新規事業担当の手島理事より、新規事業の進捗の説明があった。

会 員

WEB版では省略いたします

## シンポジウム参加報告

2025年11月21日(金)、名古屋大学東山キャンパスアジア法交流館にて開催された、2025年度名古屋大学教育基盤連携本部主催シンポジウム「大学は空間か、関係か—新しい知の共同体と学びの入口—」に本学会の鈴木克夫会長(桜美林大学)と内田康弘理事(愛知学院大学)が講演者として登壇されました。当日の様子を内田理事にご報告いただきます。

### 2025年度 名古屋大学教育基盤連携本部主催シンポジウム 参加報告

シンポジウム当日は、参加者数は169名(対面32名、オンライン137名)でした。シンポジウム終了後には懇談会が行われ、20名ほどが参加し、通信制大学の可能性と課題、通信制高校と大学との接続をめぐる課題について意見交換が行われました。

シンポジウム開催に際して、名古屋大学高等教育研究センター教授の加藤真紀氏より、今回のテーマである「大学は空間か、関係か」の設定理由が説明され、開催の挨拶が行われました。続いて、モデレーターである京都大学准教授の田口真奈氏より、「大学は通うもの」という前提が崩れつつある大学教育をめぐる現状、そして、通信制高校からの大学進学者が増加している現状を踏まえ、オンライン時代の高等教育の新たな地平を描くという問題提起がなされました。その後、講師4名による講演とパネルディスカッションが行われました。以下に当日の内容の概略を報告いたします。

第一講演は、本学会会長の鈴木克夫氏(桜美林大学)が務め、「変わる通信制大学と質保証の行方—すぐそこにある危機—」の題目で行われました。講演では、まず通信制大学への入学者数の変化や若年層が通信制大学を選ぶ背景が示されました。続いて、通信制大学の変貌および通信制大学における「場所性」と「関係性」、そして、通信制高校の質保障をめぐる議論から得られる通信制大学への示唆について報告がありました。

第二講演は、若山正人氏(ZEN大学)が務め、「ZEN大学の取組—ZEN大学の場合—」の題目で行われました。講演では、まず完全オンラインの大規模大学であるZEN大学の設置背景について、全ての人に大学進学を提供することが示されました。続いて、ZEN大学のカリキュラムやオリジナル学習システム「ZEN Study」、アドバイザー制度について詳細に説明があり、最後に、第一期生の実像やZEN大学が育成する人材像について報告がありました。

第三講演は、本学会理事で報告者の内田康弘(愛知学院大学)が務め、「通信制高校の現状と大学進学者—その特徴と課題—」の題目で行いました。講演では、まず通信制高校の制度的背景と歴史を説明し、戦後の制度発足時と比較して、対象とする生徒像や社会的役割が変化していることを説明しました。続いて、通信制高校卒業生による大学進学行動が増加している背景をデータに基づいて示しながら、通信制高校と大学との接続をめぐる諸課題を報告しました。

第四講演は、清島絵利子氏(岐阜大学)が務め、「非対面サイバー空間における双方向的な学び—約1,300名の相互評価を通じて—」の題目で行われました。講演では、まず非対面サイバー空間を活用した「日本語表現I(初級)」の授業方法について説明されました。続いて、当該授業で用いられたオンラインでの相互評価の方法が詳細に示されるとともに、採点方法としてのその妥当性や今後の授業改善に向けた報告がありました。

その後の質疑応答・パネルディスカッションでは、対面およびオンラインによる参加者から多くの質問が寄せられ、モデレーターによる議論の整理とともに、活発な意見交換がなされました。

内田 康弘(愛知学院大学)

## 会員の声

### 通信教育の現場が開いてくれた、私の新たな学びの道

はじめまして。このたび日本通信教育学会に入会いたしました、江田友祐と申します。

私は地元の県立高校を卒業後、早稲田大学人間科学部（残念ながら e スクールではありませんでした）および同大学院で建築環境学を専攻し、主に調査手法の比較やニーズ把握の方法に関して学びました。卒業後は B to B の IT 企業に勤務し、その後は独立して個人で事業を行うなど、「教育分野」とは関わることのないキャリアを歩んでおりました。

通信教育との本格的な関わりは、2018 年度に開学した東京通信大学に、設置認可および教務担当として入職したことを契機としています。メディア授業型の大学で職員として通信教育の現場に立つなか、日本の大学通信教育が抱える構造的課題や可能性を実感し、体系的に学びたいという思いが強まりました。

その思いに導かれ、今度は学生として通信教育の現場に身を置くべく、桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科（通信教育課程）に進学しました。そこでは、本学会会長である鈴木克夫先生のご指導のもと、修士論文では大学通信教育の質保証、とくに自立学習型と仮想教室型の教育モデルが抱える制度的課題について比較研究を行いました。社会人学生として通信教育を経験したことも、研究への視点を支える大きな基盤となっています。

職員としての現場と学生としての現場。これら二つの通信教育の現場が開いてくれた学びの道を、今後さらに深めていきたいと考えています。私の現在の研究テーマは、大学通信教育の制度と運用、メディア授業の位置づけ、質保証のあり方です。

2025 年 10 月に本学会事務局の幹事に就任いたしましたので、学会運営と研究の両面から、本学会の発展に貢献できるよう邁進してまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。

（独立研究者／日本通信教育学会 事務局 幹事 江田友祐）

### 「絶望」の私を「希望」へと導いた通信教育

会員のみなさま、はじめまして。この度入会させていただきました飯塚諒介と申します。大学卒業後、公立中学校で 4 年の講師生活を経て、現在、私学の通信制高校の教員として勤務し 4 年目を迎えております。3 年前から非会員として研究協議会に参加しておりましたが、思いがけぬご縁が重なり、由緒ある学会に入会できたことは誠に喜ばしく存じます。

さて、自己紹介も兼ねて私と通信教育との出会いを述べたいと思います。約 14 年前、私は強迫性障害を発症し、当時通っていた全日制高校を中退しました。中退を決めたときは「高卒認定試験を受験すればいいや」とおぼろげに抱えておりましたが、現実はその簡単ではなく病との闘いの中、孤独に毎日勉強することは決して楽なものではありませんでした。そんな折、親族から「通信制高校へ入学してみないか」と勧められました。私とはとにかく不安だけを抱えたまま学校見学に行くと、そこはまさに「絶望」という暗いトンネルの中に一筋の「希望」が差し込んだ気がしました。「私のような社会の外れ者でも受け入れてもらえる学校がある」。藁をもすがる思いで編入し、2 年かけて通信制高校を卒業しました。

あの時の出会いや経験は、いま私の原動力になっています。通信制高校の教員として勤務する中で常に悩み、考え、苦悶することは少なくありませんが、学びたくても学べなかった「私」を救ってくれた通信教育への恩返し気持ちを忘れず、未熟者ではありますが、これから本学会での皆様との交流や学びを通して、日々研鑽していく所存です。それがいつか誰かの「絶望」を「希望」となるように。

これからよろしくお願いいたします。

（通信制高校 教員 飯塚諒介）

「会員の声」を本誌に掲載します。掲載を希望する会員は、原稿（600～750 字程度、MS-Word で作成）を事務局（jade.office.1950@gmail.com）までお送りください。

## 通信教育の動向



## 全国高等学校通信制教育研究会

6月の全通研総会以降、11月中旬で各地区の研究協議会はすべて対面開催されました。各地区とも協議の中で活発な議論が交わされたと報告を受けています。10月には全通研研修会を開き、講師に早稲田大学人間科学学術院所属の内山慎太郎様に「LMSによる面接指導の質向上の可能性」と題して講演をいただきました。

多様な生徒が高校に進学していく中、各校に求められるダイバーシティに基づく個別最適な学習を、通信制の3本柱により行うためにはLMSを活用した生徒の学習状況の把握が重要になってきます。生徒の学習進捗をLMSのアプリを使って踏まえて、面接指導を工夫し実践することが肝要となります。また、DX化による電子教科書、電子レポート、そしてメディアを通じた資料・情報提供は、よりLMSの活用を促進させていくことになると思います。生徒の学習活動の状況把握は教員側の利点であるとともに、生徒自身の振り返りによる年間の学習計画と達成度の自己管理を促すことになり、自主的・主体的な学びを促すことにもつながるものであるとのことでした。

各地区の研修会においては、各教科指導における面接指導の在り方の工夫が紹介されました。また、近年重要視されている進路指導についても、内向きな姿勢の生徒に如何に自己の将来を見つめ進路志望を持たせるかや、課題のある生徒に公的な機関との連携を築いていく苦勞などの実践事例の発表もありました。

文部科学省が進める広域通信制高校をはじめとする私立高校への点検調査で判明した不適切な事例として紹介されている指導事例については、本会事務局よりの連絡として、各地区に注意喚起をするとともに、メディア利用を踏まえた、通信教育実施計画の作成についても推進するように訴えました。

今後の通信制教育においては、コンテンツ理解はレポートやメディア学習を通してより円滑に進んでいくと予想されますが、その目標であるコンピテンシーの定着に面接指導がどう生かされるのか、また定着をどう確認し評価するのが課題になっていくのではと思っています。  
(事務局長 小宮山 英明)



## 公益財団法人 私立大学通信教育協会

本協会は、通信教育課程を設置する私立大学相互の協力によって、大学通信教育の振興を図ることを目的に設立されており、現在、57校が加盟校となって運営し、大学通信教育の周知普及と水準向上の事業を推進しています。

## (1) 大学通信教育の周知普及事業

「令和7年秋期合同入学説明会」(8-9月、全国4都市)を開催しました。また、来年1~2月にも「令和8年春期合同入学説明会」(全国5都市、7日程)を実施する予定です。また大学通信教育の情報をHP以外にもYouTubeやInstagramで発信しています。

## (2) 大学通信教育の水準向上事業など

10月2・3日、職員の能力向上に資するため、「大学通信教育職員研修会」を1泊2日(京都)で開催しました。同研修会は、研修を通して職員としての資質の向上を図り、加盟校間の意見・情報交換を目的とするものです。「学習支援と就職支援を組み合わせた組織等を通じた学生支援について」の講演(星槎大学附属総合学修・就職支援センター運営委員会副委員長古川潔氏)のあと、グループごとに分かれ、職員による活発なディスカッション、意見・情報交換が行われました。59名の参加がありました。

また、11月18日、文科省中央教育審議会大学分科会「質向上・質保証システム部会」において、高橋理事長が「多様化する大学通信教育の質向上—教育支援と大学連携協力を中心に—」の報告を行いました。

なお、12月3日には、大学通信教育政策検討委員会のもと、「大学通信教育メディア授業研究会」をZOOMにて開催しました。「メディア授業における学習指導(指導補助)、生成AIを活用した学修支援について」をテーマに、「教育コーチ」の現状と今後(尾澤重知氏(早稲田大学人間科学部教授 通信教育課程教務主任))、「生成AIを活用した学修支援 チャットボットの導入の成果・課題の共有等」(範國将秀氏(京都芸術大学 通信教育課程事務局 長))の報告を行い、その後、グループディスカッションが行われ、活発な意見情報交換がなされました。  
(理事長 高橋 陽一)



## 一般社団法人 日本通信教育振興協会

(1) 文部科学大臣賞を受賞！ 令和7年11月15日、第37回生涯学習奨励賞表彰式を開催いたしました。今年度の生涯学習奨励賞の表彰は、文部科学大臣賞5名、一般社団法人日本通信教育振興協会会長賞22名、総勢27名の方が受賞の栄に浴しました。この表彰は、当会認定の「生涯学習奨励講座」を特に優秀な成績で修了した者を対象に表彰するものです。

(2) 全国の各地域で学習指導員が活動中です！ 通信教育で学び、身に付けた知識や技能、また実社会で培った専門的な知識や技能を生かし、地域での生涯学習の支援者として活動する学習指導員が、自身の地域で教室を開講したり、公民館や生涯学習センターでの講師、小中学校での課外授業の支援など全国各地で活動中です。  
(事務局長 齋藤 洋平)

## 通信教育のこの一冊②

## 奥井晶 著『教育の機会均等から生涯学習へ—大学通信教育の軌跡と模索—』

(1991 年, 慶應通信 (現: 慶應義塾大学出版会))

この書籍の著者である奥井晶氏(以下、奥井氏)は、戦後日本における大学通信教育の制度設計と実務運営に深く関わった事務職員(実務者)であり、特に慶應義塾大学通信教育部(通信教育課程)の発展において実務経験に裏打ちされた業務遂行力で、中心的な役割を果たした人物と言われ、日本における大学通信教育の歴史を知る上で欠かせない人物とも言えるだろう。

本書はその奥井氏が、戦後日本における大学通信教育の制度的・実務的な歩みを、慶應義塾大学通信教育部での実務とその実践を中心に描いた記録であり、制度の内側から教育の本質に迫る視点が本書の大きな魅力かつ特徴として挙げられる。

筆者自身も約30年前に学校法人慶應義塾の学生嘱託職員として通信教育部事務局教務課に配属され約4年間勤務した経験があり、奥井氏とは「日本通信教育学会」の会員であったことも含め、二つの共通点を持つ。そのような背景から、この書籍を読むことは、個人的な回顧と戦後日本における大学通信教育の制度理解の両面において、深い示唆を得る機会となった。

一部では、この書籍を「日本における私立大学の通信教育課程の創設とともに歩んだ人物による手記」と評するが、内容としては、戦後日本における新しい開放型教育としての大学通信教育の歴史的背景、実践の記録、理論的考察がバランスよく配置されており、教育行政、大学経営、教育学の観点からも読み応えがある。特に、大学通信教育における支援体制や、学習者のモチベーション維持の工夫など、実務と実践に根ざした知見が豊富に盛り込まれている。

実は、奥井氏は、慶應義塾大学の通信教育課程における教材制作と事務処理を担うために設立された「慶應通信教育図書株式会社(後の慶應通信株式会社、現: 慶應義塾大学出版会株式会社)」にアルバイト社員として入社し、後に正社員となって、事務職員の立場から大学通信教育

に関わった。その経験を通じて、大学通信教育の運営において事務職員が果たす役割の重要性を本書は明確に示していることは非常に高い価値を持つと言える。

そして、筆者が本書から強く感じたのは、大学通信教育において、印刷教材等による授業を通じて個々の学習者が単独学習を行う中で、学習指導、教材発送、教材改訂、科目修得試験の運営、それらに加えて、各種面接授業(スクーリング)の手配などを事務職員が担っているという点である。これらの業務は、通学課程の事務職員と比較して、大学教員を支える教育者としての役割も含んでおり、その業務遂行には事務職員としての高い矜持と学術的な専門性が求められる。これは筆者自身の経験とも重なり、大学通信教育における事務職員の存在意義を再認識する機会にもなった。

加えて、この書籍では、昭和20年代の大学通信教育における創設期から始まり、学園紛争、放送大学の設立、そして平成初頭までの大学通信教育の流れが丁寧に記されている。ただ、制度の変遷を追うだけでなく、「教育の機会均等」を単なる「入口の平等」にとどめず、「学びの質と継続性」にまで広げて考える奥井氏の視点は、現代の教育政策においても再評価されるべきものであろう。

そして何よりも、大学通信教育が単なる「代替手段」ではなく、「新しい大学教育の可能性」を切り開くものであるという奥井氏の主張は、今後の大学教育制度のあり方、そして大学教育の未来を考える上で、極めて示唆に富んでいる。

総じて、この書籍は、過去の制度と実践を丁寧に振り返りながら、未来の教育に対する洞察を与える“温故知新”の書籍と言える。だからこそ、この書籍には一読の価値があり、筆者自身もいつか、平成初頭から令和までをテーマとした大学通信教育に関する著作を執筆し、大学通信教育に関わるすべての人に届けたいという強い想いを新たにしたいところである。

寺尾 謙 (神奈川工科大学)